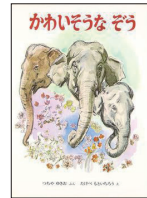




episode 4 かわいそうな「ぞう」のお話

投稿者 岩倉 まり さま(大阪府)

『かわいそうなぞう』
土家由岐夫 文
武部本一郎 絵
金の星社 1970年



「お母さん、今日、幼稚園で『かわいそうなぞう』の絵本を読んでもらったよ。」と、長男が神妙な顔で話した。『かわいそうなぞう』は、戦争中の上野動物園での実話を基にした創作絵本で、空襲で檻が壊れ、ぞうが逃走することを防ぐために、ぞうが殺処分される内容だ。

四、五歳児には難しい絵本だと思ったが、七月の暑い日だったので、先生方も子供たちに戦争の悲しみや理不尽さを伝えなかったのだろうと解釈し、「そうだね、可哀想だったね。ただ、戦争中だったから、仕方がなかったんだよ。戦争は人だけでなく、動物も不幸にしてしまうから、意見が対立しても戦争をしない方法を考えないとね。」と長男に話した。長男は、苦笑いしながら、「お母さん、ぼくの読んでもらった絵本とは、ちょっと違う。『かわいそうなぞう』なんだけど、最後は、とっても幸せになるよ。」と答えた。

最近の『かわいそうなぞう』は、悲しい部分を編集しているのだろうか、と考えた時、ドラえもんに出てくる『ぞうとおじさん』を思い出した。「もしかして、ドラえもんの方？ ドラえもんの道具で、殺処分されるはずのぞうたちをインドに送った話の？」と息子に聞いた。「お母さん、勘違いしてるよ。頑張って、バスケットとか靴とか、ピアノとか車とかを作るんだけど、『もうけっこう』って怒られちゃう『かわいそうなぞう』の絵本だよ。」と、長男は一生懸命、絵本の内容を思い出しながら話した。「ああ、それは、『ぐるんぱのようちえん』じゃない？」と私が聞くと、「ああ、そうそう。たしか、そんな名前だった。」と長男は笑った。

今思えば、あの頃から、長男とはよく話が噛み合わない。長男は名前を正しく覚えないことが多く、長男の話から私が推理をするといった謎解きが多い。もうすぐ高校生になるのだから、もっとしっかり覚えて欲しいなと思いながら、絵本棚の『ぐるんぱのようちえん』と『かわいそうなぞう』を久しぶりに読んだ。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2021」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



あひ『かわいそうなぞう』です

太平洋戦争中の上野動物園で、ぞうが戦時猛獣処分を受け、餓死させられた事件を描いた物語、それが『かわいそうなぞう』(土家由岐雄 文、武部本一郎 絵)です。1970年8月に金の星社より「おはなしノンフィクション絵本」と冠して出版され、実話による反戦童話として広く知れわたり、戦争の悲惨さを訴えてきました。

単行本の形で世に出たのは1970年ですが、実際にはもっと古く、1951年刊行の『愛の学校 二年生』(東洋書館)が初出です。全17話を収録したアンソロジーの“第十五教室”として、「せんそうはこんなことまで」という見出しで掲載されたのが、最初の「かわいそうなぞう」でした。

『ぞうもかわいそう』なんです

初出の童話集が、平和教育活動の一環として戦争児童文学による読書指導を推し進めていた教員らの目に留まったことで、「かわいそうなぞう」は平和学習に採用され、国語の教科書にも収録されました。その一方で、「ノンフィクション」と謳いながらも史実と異なる点が指摘され、賛否わかれた評論が次々に出現した、歴史的な問題を含んだ絵本なのです。

『かわいそうなぞう』に隠された問題点を最初に社会へ投げかけたのは、児童文学評論家の長谷川潮氏です。1981年8月刊行の「季刊児童文学批判」創刊号に、「ぞうもかわいそう－猛獣虐殺神話批判」と題した評論を掲載しました。『かわいそうなぞう』に描かれている空襲と殺害の時間関係が事実と異なっていることを調べ、大事な史実が隠されていることを発見したからです。

長谷川氏自身もそれまで、『かわいそうなぞう』を高い評価とともに受け入れていたのですが、野坂昭如氏の『戦争童話集』に出会ったことで、疑義が生じたのでした。「婦人公論」1970年1月号から12月号まで連載された「戦争童話」全12話の一編「干からびた象と象使いの話」は、やはり上野動物園でゾウをは

じめ猛獣が殺害処分された事件を扱ったお話です。1975年に発行された単行本を読んだ長谷川氏は、「飛び上がった」ほど驚いたのです。

なぜなら、野坂氏と土家氏が描いた空襲と殺害との時間関係が全く逆だったからです。猛獣虐殺を、東京が連日連夜空襲を受けるようになって行われたと描く土家作品と、空襲の危険が切迫していない状況下で国民を戦意高揚させるために政府が行かせたと描いた野坂作品とのくっきり違いに驚いて、事実を調べ、猛獣が殺された1943年にはただの一度も東京に空襲がなかった史実を確認するのです。

これは、殺処分する目的の違いを生み出し、命令を出した者の国民への姿勢を、否定するか肯定するかが浮き彫りとなったと述べています。長谷川氏の批判に対し土家氏は、「文学性を高め、感動を深めるために、背景を空襲激化のときに置き替えた」と意見しています。「感動とは何か」、白熱した論争に発展しました。

史実と物語、感動と虚偽のはざま

長谷川氏の批判を下敷きに、翌1982年8月、NHKが猛獣虐殺の真実を明らかにする番組「そして、トンキーもしんだー子が父からきくせんそうどうわ」を放送しました。そして生まれたのが、『かわいそうなぞう』の誤りや不備を正した絵本『そして、トンキーもしんだ』(国土社)です。

長谷川氏は、作品をなんの疑いもなく受け入れていた自分が、野坂作品を通して自身をも批判していたことに気付いたと述べています。

『かわいそうなぞう』『干からびた象と象使いの話』『そして、トンキーもしんだ』、3冊セットで読み比べてみてください。

文献

- 1) 長谷川潮：ぞうもかわいそう；猛獣虐殺神話批判，季刊児童文学批評 1(1)，pp.4-16，1981.
- 2) 長谷川潮：日本の戦後児童文学；戦前・戦中・戦後，久山社，東京，1995，pp.103-113.
- 3) 西山利香：終わらない「かわいそうなぞう」問題，学芸国語教育研究 35，pp.2-16，2017.